北越雪譜

初編

下之巻

和書門 類
三六五二六號
一二二函
一四架
七冊

内閣文庫
和書 類
三六五二六號
一七五函
五架
七冊

内閣文庫		
番號	和	36526
冊數	7 (3)	
函號	175	78

国立公文書館
National Archives of Japan

北越雪譜初編巻之下

目録

渋海川さかべつたう　順上下ぶ　　鮭の字考
鮭の食用　　鮭を出る所並鮭始終
鮭を捕る打切並ヅ　　撈網
漁夫の溺死　　千曲川の総滝
鮭漁の類術　　鮭の洲走り
人家の垂氷　　笈掛岩の氷柱
滝の氷柱　　雪中の寒行
寒行の威徳　　雪中の幽霊
関山村の毛塚　　雪中鹿を追ふ
狥り山の大猫　　山言語

日本政府図書
浅草文庫

童の雪遊び

雪に座頭を降せ

通計二十三條

越後奇跡録 五巻 近刻

鈴木牧之編撰
京山人百樹刪定

此書は越後七不思議の細説并に図名所旧跡の古跡并図國中温泉の圖并に主治山川勝景の圖説近古人物名誉ある傳播の餘種々の奇談其地を踏て其事を見るがごとくに記したる假字文の書なり

京水百鶴画圖

于此氏葉の餘地在り空しう並べるを以て此の書名を標して大方の諸君に報じ刻に先んずるの好評を祈る

書肆 文渓堂 謹識

北越雪譜初編 巻之下

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○渋海川さかべつとう

我国の俚言に蝶をべつとうといふ渋海川のほとりにてはきやうべつとうといふ蝶は諸の虫の羽化する所の大なるを蝶といひ小なるを蛾といふ本艸其種類はなはだ多し草花も蝶に化する事本草にもみえたり蝶の和訓をかはひらこといふは新撰字鏡にもみえたりさかべつとうといふ名義は未考さて前にいへる渋海川にて春の彼岸の頃幾百万の白蝶水面より二三尺をはなるゝまで羽もふれあふばかり群るが高さ八丈あまり両岸を限りとして川下より川上の方へ飛行その形状花のふゞきとつゞくは幾里ともしれぬ流れに霞をひきたるがごとく朝より夕べまで悉く川上へつゞきたるがその限りをしらず川水もみえざるほどにて日も暮るゝとするに

いはゞさらに水面におちいりて流れて、そのさま白布をながすがごとし。其蝶の形燈蛾にゝて白蝶也。我国に大小の川々幾流もあるなかに此浩海川にのみかぎりて毎年かゝれど此事あるも奇といふべし。しかるに天明の洪水以来此事絶てなし。

○本草を按るに石蚕一名を沙虱といふもの山川の石上に附て繭をなし春夏羽化して小蛾となり水上に飛ぶといへり。件のさうべつなるは浩海川の石蚕なるべし。其種を洪水に流し尽しゝなるべしといふもさもあるべし。他国にも石蚕を生ずる川あらば此蝶あらんもしるべからず。余此蝶をみざりしゆゑ近隣の老婦若きころ浩海川の辺りより嫁せし人ありしゆゑ尋問ひしにその老婦の語りしまゝをこゝに記せり

○鮭の字の考

新撰字鏡といふ字書は本朝の僧昌住といひし人今より九百四十年あまりのむかし寛平昌泰の年間作りたる文字の吟味をなす書也。むかしより世の学匠たち伝へ写して重宝せしときゝしを近き頃村田春海大人右の書を京都にて購得てのち享和三年の春創て板本となし世の重宝となりてより後の学者の机上に置は実に春海大人の賜なりけり。右の字鏡ありて後二十余年を歴て源の順朝臣の作りたる和名類聚抄あり。是も字書也。元和の年間那波道円先生創て板本とせられしより（後の板もあり）さて和名抄ありて後五百年ちかくをへて文安年中下学集といふ字書ありしことも元和三年創て板本となりしより下学集より五十三年の後明応五年林宗二（堺の町人）節用集を作り文亀のころの活字本ありしといへり（いろは引節用集の権輿也）其後百八十年を歴て元禄十一年に槙島昭武駒谷山人が作りたる（江戸の人）書言字考一名合類節用集といふ板本あり。宗二が節用集を大成したる物なり（いろは引之）（平他字類抄のるゐ下に引用せざるものはあげず）本朝の字書のるゐ大低は件のごとし。さるを今俗用する節用集は新撰字鏡和名抄を先祖の父母として後のは皆其子孫也。是は鮭の字の事を言んとて童蒙の為に先いへるなり。○新撰字鏡奥の部に鮭（佐介）

とあり和名抄にハ本字ハ鮏俗に鮭の字を用ゆるハ非なりといへりされバ鮭の字
を用ひしも古し同書に崔禹錫が食經を引て「鮏其子苺に似て赤く光り
春生まれて年の内に死る故にまた年魚と名く」とあれバ新撰字鏡に鮏の
字を出ししハ鮏と鮭と字の相似たるを以て傳写の誤りを傳へしもしるべからず
また鮭ハ河豚の事なるをや下学集にも鮭干鮭と並べ出せり宗二が文亀本の
節用集にも塩引干鮭となるべしとぞせりとまでも鮏と鮭と傳写のあやまりにや
駒谷山人が書言字考にハ○鱖○石桂魚○氷豚○鮭と出して注に和名抄
を引て本字ハ鮏といへり大典和尚の学語編にハ鱖の字を出されてより鱖を
あさぢト訓じ唐の字書にハ鱖ハ大口細鱗とあれバ鮏にふさはせるなるらん字彙
にハ鮏ハ鯹の本字にして奥臭とといふ字と同じといへり按るに鮏の鮮鱗ハとくさ
らに奥臭きものなるにやあらん鮭ハ鯸鮐の一名ともいへバ鮭にハいよく遠
しどもまれかくまれ鮏の字を知りて俗用にハ鮭の字を用ゆべし件の如く

鮭の字も古く用ひきたれバいはゆる和文章にも鮭の字を用ふべし鮏の
字ハ普くハ通じ難しもつとも鮏ハ姑く鮭に從ふ

○鮏の食用

腥にて喰するハ○奥軒○膾○鮓之○烹る○炙その料理によりて猶
あるべし醃にするを塩引また干鮭といひしも古き事まへに引る書に見
えたるごとし延喜式にのせたる内子鮭ハ今いふ子籠り鮏の事なるべし
又同書に脊腸をミナコヽト訓り丹後信濃越中越後より貢とせる事も
みえたれバ古代ハ鮏を供御にも奉りたるなるべし都へ遠きよりそろひたれバ
塩引なるらん頭骨の澄徹ところを氷頭とて膾に食ひ子を鮞といひてこれを
醃にしたるも美味の子あるまゝを塩引にしたるを子籠りといふ古へのまゝよりト
いひしも是なるらんが本草に鮏味ひ甘く微温毒なし主治中を温め
氣を壮にす多く喰へバ痰を發すといへり我国にて塩引にしたるを大晦日の

文英堂蔵

節にハ用ひざる家なし又病人にも喰せ他国より腫物にいむもハこゝにあらざるもまたおやあらん

○鮭を出す所

鮭ハ今五畿内西国より出る所を聞ず東北の大河の海に通ずるよりハ鮭あり松前蝦夷地最多し塩引として諸国へ通商ハ此地に限る次よりハ我が越後に多し又信濃越中出羽陸奥之常陸にもありときくつてまちの国の鮭ハその所の食にあつるに足るのミ通商をするにいたらず江戸ハ利根川にありといへども稀なるゆゑ初鮭ハ初鰹の價に比すとぞ我国にてハ毎年七月二十七日所々にある諏訪の祭りの次の日より鮭の漁をはじめ十二月寒のあけるを漁の終りとす古志の長岡奥沼の川口あたりにて漁したる一番の初鮭を漁師長岡へそまつりけれバ例として鮭一頭に一頭を一尺といふ米七俵の價を賜ふ鼻より尾までありへそまつるさけにハ寸尺の定めありし俵のかず下る 鮭の大なるハ三尺四五寸小なるも二尺四五寸なるもあるべし猶小なるもあり

男魚女魚の名ありめをハ子あるゆゑをさきより價貴し五番まで奉りて後を賣る初鮭の貴きゆゑもつて知るべしこれを賞するハ江戸の初鰹にをなじきとぞ初鮭ハ光り銀のごとくにして微青をおび肉の色紅をぬりたるが如し仲冬の頃にいたれバ身に斑の錆いで肉も紅ぬ薄し味もまた劣れり此国にて川口長岡のあたりを流るゝ川にて捕りたるを上品とし味ひ他に比すれバ十倍々僅に其地を去れバ味ひ美ならずその味ひ美なるものハ北海より長江を泝りて困苦するの度にあたれるゆゑなるらん奥急浪に困苦バ味ひなるとぞ甘美のもの之北海の魚の味ひ厚と南海の魚の味ひ淡の差ひあるがごとし

○鮭の始終

我国の鮭ハ初秋より北海を出て千曲川と阿加川の両大河に泝ること其子を産んとて也女魚に男魚随てのぼる泝る事およそ五十余里河に在

渋海川奇蝶之圖

事ハおよそ五ヶ月あまりにしてその間に八九十十一十二月人に捕らるゝことなきハ海へ下る故に大
小ありて子を産つける所ハかならず心ありて一定ならずといへども千曲と魚野の両
河の合する川口よりふり沙に小石のまじるゆゑことよりをおのれが産所とし流
れの絶急ならぬ清き流水の所に産んとて鮏の捨く群るを漁師のま
とゞに掘につくざまにつくともいふ 沙をわるにさながくのくぼみをなせゆゑざまことのざまといふ 女魚男魚ともに
尾をもて水中の沙を掘るその廣さ一尺あまり深さ七八寸長さ一丈あまり數日
にして是を作るつくりをはれバ女魚そのうへ鮞を一粒づゝ産むを又そく
男魚己が白鯀を彈着直に女魚男魚掘のけたる沙石を左右より尾鰭にて
もてひきかけて鮞を埋む一粒も流さる事をせずさて此一掘に産をはれバ又そこに
並て掘りてハ産るゝなり幾條もかくのごとくなりて終にハ八九尺四方の沙中へ行幾
よく腹の子をのこらず産をはる或ハ所を替ても産とぞ沙に小礫の交りたる
所にあらざれバ産ずと漁師がいへりその所為人の智にをさ〳〵おとらぬぞ

産終るまでの困苦のうへに尾鰭を損ひ身痩労れおのづから志てうなくくだり
深淵ある所にいたりてハしばらく沈み居て労を養ひもとのごとく肥太りて再び流
に泝る掘につきたる時ハ漁師もこれをとらでハなく捕るものあれども強てハ
せぬなりとぞ女魚さへとらざれバ男魚ハ其所をさらぞ鮏の河に泝るハ子を産んと
てなりその女魚に男魚随てのぼるハ子の為に女魚を助るなりこれとも又人の
心にてはかりしりさて奇なる事ハ河の廣き場にてハ鮞を産おきてたる所洪水など
にて瀬かハりて河原となりしが幾とせ過ても産たる子腐ずふたゝび瀬となれバ
その子生化して鮏となる一年我が任む所の在なる魚野川のほとりに任む人
井を掘しに鮞の腥なるをありいだしたりしと友人がかたりし鮞の生化せる
を漁師のことばにはやけるともいふ 早化 身ヨ化ス 鮞水にある事十四
五日にして魚となる形ち糸の如くたけ一二寸腹裂て腸をあらはすゆゑに佐女の名
ありといひ傳ふ春にいたれバ長じて二寸あまりになることをまつりてハ捕らぬ事

ともいふ此子鮭雪消の水に随ひて海に入る海に入りてのち裂たる腹合して腸をなすと漁父がいへり前にもいへる如く鮭の漁ハ寒中を限りとす寒あけて捕れバ祟をなすといひつたふ我が若かりし時水村の一農夫寒あけて后獺のとりたる鮭を奪ひこれを喰ひし熱にうかされ三日にして死たる事ありされバたゝりあるといふ口碑の説も誣べからず又くまが産はきてよりむすこどもとまらずその家断絶せしといひ伝ふ鮭の大なるハ三尺四五寸にあまるもあり之ハ年々網を脱れて長じたるなるべし我が若年のころハ鮭あまたとれたるゆゑその価もいやしかりしが近年ハ捕る事少きゆゑ価もおのづからむかしに倍せり年々工を新にして漁をなすゆゑ捕減じたるなるべし女魚の大なる腹ハ鮞一升もあり小なるハ三四合にをよぶ江戸に多くめてあつかふ塩引と唱るハ鯵鮭とて越後の鮭とハ一品別種なる物なりと或物産家のいへり河に生まれて海に成長すれどもむかしより海中に網に入たる事なし其始終をおもふに鮭ハ鱗族の奇魚といふべし

牧之常におもへらく寒気の頃捕たる鯽と男魚の白鱁とをまじへ鮭居る川の沙石に包み瓶やうのものにうつし入鮭なき国の海に通ぜる山川の清流にかの瓶にうつしたるはらごを沙石のまゝさけのすをつくる如くになしおき此川にかく鮭いでくるとも三年捕る事を国禁あらバ鮭を生ぜんもしるべからず生ぜバ国益ともなるべし（江戸の白魚ハむかしそのたねをうつしたまひしときゝつこれもおなじかるべし）

○打切り並につで

北海新潟の海門におつる大河を阿加川と千曲川とす（あか川のすへこゝにいふぞ千曲川一名を信濃川ともいふ隈の字をも用ふ）千曲川の水源ハ信濃越後飛騨の大小の川々あまたの流を併て此大河をなせし越後ハ妻有上田の二庄をすぎて奥野川の急流をなし魚沼郡藪上の庄川口驛の端にいたりて信濃を流るゝ川と合して古志郡蒲原郡の

中央をながれて海に入る信濃の流は濁り越後は清し信水は犀川の濁水あるゆゑ也鮭初秋より海を出て此流に泝る蒲原郡の流は底深く河廣ゆゑ大網を用ひて鮭を捕るかの川口驛より上上田妻有のあたりまでは打切といふ事をなして鮭を捕るその仕方は夏の末より事をはじめて岸根より川中へ丸木の杭を建つらね横木をそえてこれに透間なく竹簀をこほして墻のおちになし川の石をよせかけて力となす長さは百間二百間にいたる周圍形は川の便利にまかす船の通路はこれを除きて障りをなさず又通船の路印を建て夜の為とす是にはつどうといふ物を簀下へならべ鮭の入るべきやうにしおく也（のぼる鮭をももらしおく）此つどうの作りやうは竹を簀にあみて末をば縛し鮭の入るべき口の方は竹の尖を作りかけて腮をなし地につく方はひらたく上は丸くし胴には彭張あり長さは五尺ばかり也鮭入らんとすれば口廣がるやうにいかにも功に作りたるもの也これをつどうといふは筒といふべきを濁り訛りたるなり田舎言語には古言のまゝを

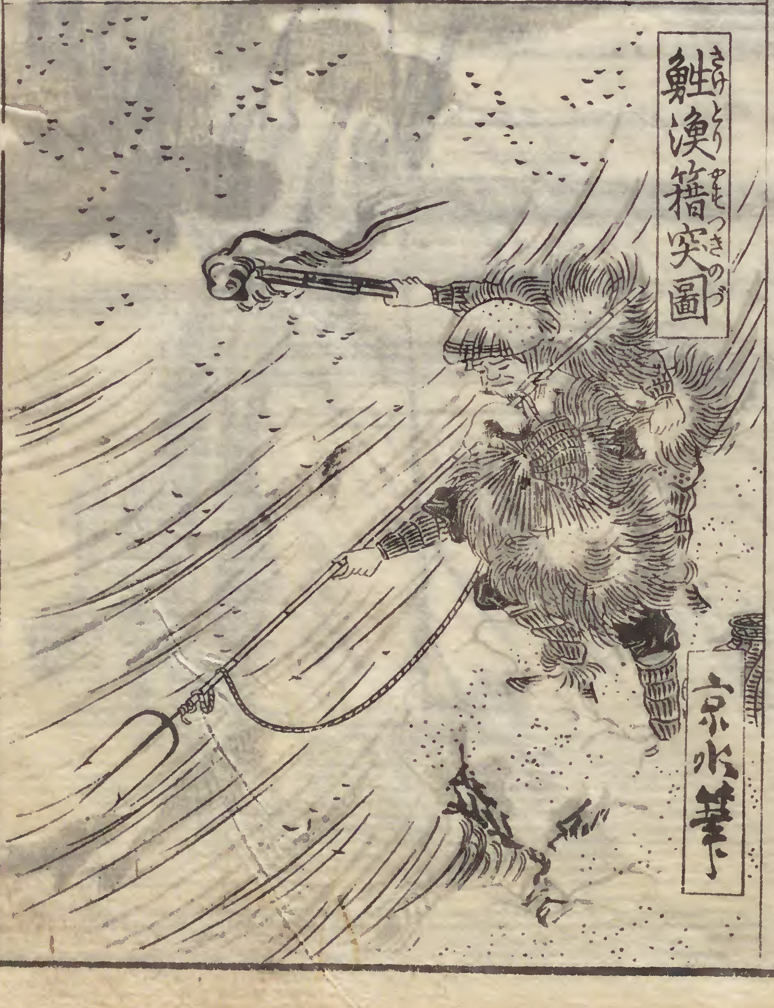
いひつたへてむかしをしのぶもあれど言の清濁をとりちがへて物の名などのかはりたるも多し（阿加川をあが川といふ）さて此打切を作るは幾ばくの費ある事ゆゑ漁師ども語らひあはせてなす事也打切なる岸には假に小屋をつくりて漁師ども昼夜こゝにありて夜も寝ずして鮭のかゝるを待つ七月より此業をなしはじめて十二月寒明まで一連のものかくのごとし此小屋にありて鮭をとる此打切は川口を一番として水上へ十五番まであり是はいづくの持とさだめて川にその境目ありてまもるそれぞれ嚴重也○さて鮭は川下より流に泝て打切にいたり船のかよふべき所は流れ打切にせかれて小滝をなせるゆゑ滝にのぼるをいとふにや大かたは打切のよどみにいたりかの垣にせまり潜るべき所やあるとてかしこをさぐりつどうを見つけ入る所にいたりくゞりいでんとしてこゝに入ればそこあるゆゑいでんとするに口に尖りの腮ありて出る事あたはず○さて小屋にあるものはかゝりつらんとおもふほどをはかりまちうけて小舟をのりいだし（大木を二ツにわりて是をくりぬきて舟にしたるもの也○瀬の浅き所は舟を用ひず）

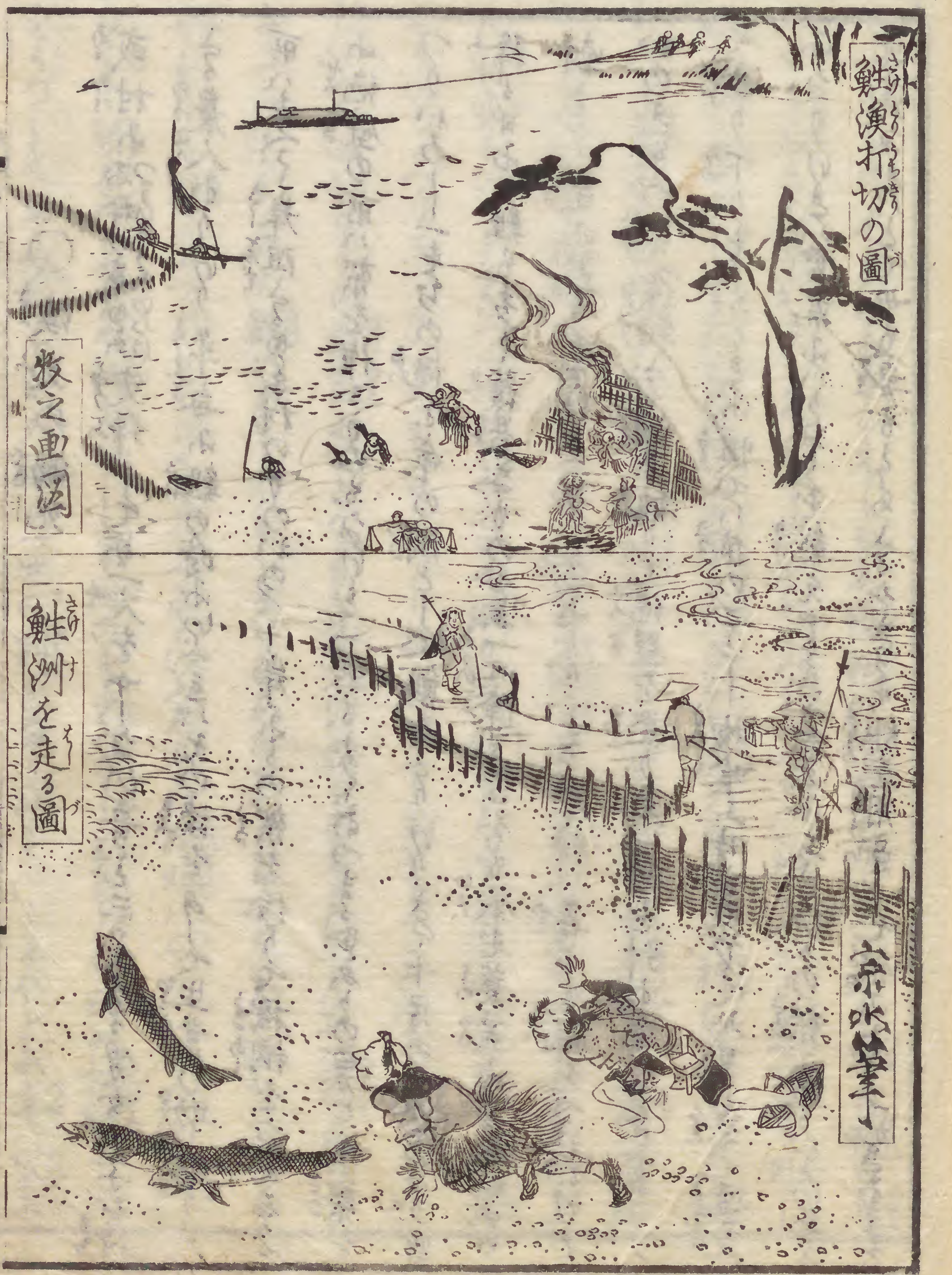
雪下る寒夜なれども銭の為にそのさむさをもいとはず赤裸になりて水に飛入り
つゞをたづし鮏あれバつゞのまゝ舟に入れさけをいだきて大鮏ハ三尺あまりもと
あるものハ鮫狂ふ故に魚撲といふものにて頭を一打うてバ立地死して舟に寄る
なるけハ此魚撲といふもの馬の爪をきりたる撲にあらざれバ死せず私につたへり
これつちにてハいかにうち打ても外ず又まづ頭に打ごき所もありと漁夫がいへり
鮏ある所にてハいづくにても此なつちを用ふれど馬の爪なるつちこそよぞ　まけど助賈なるとて鮏の仲買するもの此小屋に
きたりてさけをかひとるゑ

○撈網

かきあみとハ攫網なり鮏を攫ひ捕るをいふその攫ひ網の作りやうハ又ある木の枝を曲げてあはせて飯櫃なりに作りこれに網の袋をつけ長き柄ありてそれふねよりとも岸の阻たる所ハ鮏岸につきてのぼるもの故岸に身を置なられの架をかまへてそこに居て腰に魚撲をさし鮏を撈探りてすくひとるなり

岸の絶壁なる所ハ木の根に藤縄をくゝして架を釣りてそこに居て撈網をもるも稀にあり幾尋ともしれぬ深淵の上にこのよるをつりて身を置一條の縄に命をつなぎてかくその業をなさする怖しともおそれざるハ此事になれしるゆゑなるべし




鮏漁打切の圖
牧之画図
鮏洲を走る圖
京水筆

絶壁擢網の圖

○漁夫の溺死

或村に不祥の事あり。つまびらかにいはゞ夫婦して母一人をやしなひ五ツと三ツになる男女の子を持
てる農人ありけり。年毎に鮭の時にいたればその漁をもして生業の助とせり。此
所はすべて岸阻なる山の村のならひ岸にかの架を作りて攫網をもて漁る
に絶壁の所は架を作るものもなければ鮭もよくあつまる也。かの男ここに架を
つりおろし一すぢの縄を命の綱として鮭をとりけり。さて十月の頃にいたり雪
降る日は鮭も多く獲易きものなり。一日降る雪をも厭ず蓑笠に身をかため
朝より架にありてさけをとり畚にとりいれたる時は畚にも縄をつけおけば
おのれまづ架を釣る綱に縋りて絶壁を登りさて畚を引あぐるとつねになせり。
て登り下りするもこれに慣ては猿のごとし。物喰ふ時ものぼるに此日も暮て雪荒
になりければ雪荒ゆゑはやくかへるぞ鮭えりをきりが家にふたゝびの架にゆかんといふを
雪荒なればとて母も妻もとゞめけるをきかず炬を用意して架にありてかきあとさきを
せしにそこうしてさけあまたえし也。鵜飼の謡曲にいふごとく罪も報も後
の世も忘れはてておもしろくて時をぞうつしける。○かくてその妻は母も臥し
子どもも寝らしぬればこの雪あれに夫はさこそ凍え玉ふらめ行むかへてつま飯
らんと蓑に其の帽子をかぶり松明をてらし松明二本を用意して腰にさし
かしこにいたり松明をあげてさしのぞき遥下にある夫にこゑかけいふにさむからう
ん初夜もいつかすぎつらんものや。せめて飯り玉へ飯もおこしにして酒もものを置
たりいざくたり玉へといまつもおろすべし。提も入るやうにありくぞそれも持来たり
といふも西かとしの雪荒ゆゑよくもきこえず猶こゑをあげていへば夫これを
きてつけよろこべよ鮭はあまたとりたるぞおそくはうちよりてうまき酒をのむべし
今すこし捕てくらんそちはさきへかへれといふにさらば松明はここにおかんとて燈し
たるまゝ架をつりおろす綱をくくしたる樹のもとにさしおき別の松明に火
をうつして立かへりぬ。これぞ夫婦が一世の別れなりける。○さるほどに妻は家に

かへり炉に火を焼てあたゝかなるものくはせんとさあぐしにおそく待居たりしに時うつれども皈りきたらざればまちわびてふたゝびかの所にいたりしにかのえさしたるたいまつもみえざれば持たるたいまつをかざして下をみるにひかりもよくハとゞかで夫のすがたもみえず声をかぎりによべどもこたへもなきにさてハ架にハなれねあやまちにてもいぶかしと心をしづめて松明をふりてかゝげ登りし跡の雪ありあなやとあたりをみまはせばさいぜん木のまたにさしおきたる炬もきえおちてありしまゝに心つきて持たるたいまつにて猶よくみれば架をつなぎし命のつなの焼残りてありしを見るよりむねせまりたいまつの火にやけおちて綱をきりて架ハおちて夫ハ深淵に沈みたるならずやいかに泳をしりたりとも闇夜の早瀬にハおちたる手足凍え助り玉ふべき便ハあらじこハいかにせんと姑にいひきけんと涙を雫にふらせて哭けるが我もともにと松明を川へ投入身を投んとおもへるが又おもひかへしつくづくおもへば老たる母さまと稚き子どもら哉

養ふものなく手をひかるゝ路上に立玉ふらん死ぬるにも死なれざる身にハ成るなるや玉へこがつまと雪にひれふしなげけるつるにきがつきて声をあげて哭になきたりかくてもあるべきならねバせめて焼残りたる綱をしるしにもち暗き夜にたいまつもなく雪荒に吹れて泪もこほるむなしくなくなく立かへりしが夫が死骸さへみえざりしと其所に近き邊りの友人が此頃の事とてくはしく物がたりせり

○総滝

総滝とハ新潟の湊より四十余里の川上千隈川のほとり割野村にちかき所の流にあり信濃の丹波島より新潟までを流るゝ間に流の滝をなすハこゝのミなりその総滝とハ川はゞハおよそ百間ちかくもあるべきに大なる岩石竜の臥したるがごとく水中にあるゆゑにおとしくる水これに激して滝をなすと鮭これにいたりて激浪にのぼりかねて猶豫するを漁師ども仮に架橋を架わたし岸に

ちいさき岩の上の雪をほりすてこゝに居てかの擢綱をひきさゝへ命の憑とし
かの人々己が腰に縄をつけてこれを岩の尖りなどに縛しかくしてこゝに往来する
中には岩に足のかゝるべき所をえぐりて作り岩にとりつきて登り下りをなす若
一あしを過つ時は身を粉に砕きて滝におちいるなりその危きこといはん方なし
余前年江戸に在し時右の事を先の山東翁にかたりしに翁曰世路の灘
は悠滝よりも危からん世は足もとを見て渡るべきにやとよく笑ひて格言なりしと
耳にとゞまりしが今偶然おもひいでゝこゝに記せり

〇鮭漁の類術

〇当川　三角なる網をいふ　〇追ひ川　水中に杭をたてあみをはりさけを水をうちてさけをおひこむ　〇四ツ手網　他国にもあれど
〇金鍵　水中のさけをかぎにかけてとる　その手もまた奇く妙なり　〇流し網　さしあみともいふあみの長さ二百けんあまりありかんどうとありゆへをそるゝがあり
〇簎突　水中のさけを見ながらゆへにつきとる一ツものゝごとくなし　その手練の見事なるなど妙なり　〇このほかあまたあり
といへども詳に解んは駁雑ければその網をのせり

〇鮭の洲走り

さけのすばしりとは雪前に河原などにあるを人にせめらるゝ時人もし追
はしればいきほひして水を飛離まづ河原にのぼり網ある所をさとく水にとび入りて
あみを退るゝ也此時は大鮭はこゝにそこて水をはなるゝまへよりぬくる小鮭など
跡に随ひてのぼり河原をはしる事四五間にをよばざるまでも箭のごとくにして人
の足もおよびがたしさきにはしる大鮭かの物にきあたりて横に倒るゝ時はあとより
はしる鮭もおなじくつまづきてふたゝびおきざる人の捕るを俟がごとしされはこそ
して手も濡さず二三頭のさけをうることありかつ足無して地をはしり倒れて
ふたゝび起ざるなど魚族中比ふべきものなきは奇異といふべし

〇垂氷

前年牧之江戸に旅寓の頃文墨の諸名家に謁して書画をこひし時前の
山東庵にも交情厚くなりてしばしば訪ひしに京山翁当時はいまだ若年に

りしがある時雪の話につけて京山翁いはく今年正月友人らと梅見にゆきしくるゝさ青楼にのぼりその暁雨ふりいでしがほどなくやみけるゆゑ青楼を出て日本堤にさしかゝりしに堤の下に柳二三株ありその柳にかゝりたる雨垂氷となりて一二寸づつ枝毎にひしとさがりたるが青柳の糸に白玉をつらぬきたる如くおりふし旭のかゞやきたるはえもいはれざる好景なりしゆゑ堤の茶店にやすらひひさしくながめつゝあそびし詩を作りし事ありきこれは余寒の暁に雨のこぼれしがたまたまなる気運の機工を得てかゝる奇景をみたるなりとて珍しがりてかたりしが暖地ゆゑにはめづらしくもおもふべけれど我国の垂氷に比ぶれば氷柱の一尻にもたらじと心におかしとおもひしことありき○そもそも我国の垂氷をいはんに他は姑く舎てまづ我家の氷柱をいはん表間口九間の屋根の簷に初春の頃の氷柱幾条もならびさがりたるその長短はひとしからざれども長きは六七尺もさがりたるが根の太さは二尺めぐりにひとしきもあり氷晶をもて簾子を作りかけたるがごとくさしもに我国の人は稚きより目なれてめづらしからぬ垂氷を吟咏に入るものなし

右のつららは明りにさはるゆゑ朝毎に木鋤にて打おとすをも又家峯の谷になりたる所を俚言にだきといふだきは春解るや棟の雪のおちたまりたるに注ぐゆゑつららは簷よりも大きに下にさがりかゝる所は二丈もさがる事あり次第にふとりて大になるも物にさはらぬ所はすてゝかまはざるをいつか打砕く時は大力の男杭などにてそろそろに打てゆるぐをまちてくだけたる四五尺なるを童らが打よりて手遊の雪舟にのせて引きありきて遊ぶもありこれらは我家の氷柱にて珍らしからぬ宮寺のつららは猶大なり又山中のつららは里地に比しがたし

○笈掛岩の垂氷

我が住む塩沢の駅三里余に清水村といふあり此村持の山に笈掛岩といふ在高さ十丈あまり横二十五間あり下に谷川あり登り川といふその形ち屏風をひらきたてたるが如し岩の頂き反り伏して川に覆ひたる下は四五十

人坐して狭からねどゆくゞ糸あるがごとし我が上越後にハ名をよぶ奇岩おほき中にこれもその一ッ也笈掛岩の氷柱こそ我が国の人も目をおどろかすなりそのつらゝあまた垂下りたる所ハ長さ六十丈ばかり太さハ二三抱もあるべし垂たる形状ハ蝋燭のかゞまりたるやうなれど里地のつらゝとちがひて屈曲種々のかたちをなして水晶にて工に作りたるがごとく玲瓏として透徹るが暾の暉さすハものに比ふべきなしと此清水村の里正阿部翁のものがたりにてきゝぬ右のつらゝ見んと我をさそひしがつらゝハめづらしからねば強てすゝむ人なし此清水村の阿部翁ハむかし世に聞えたる阿部右衛門の尉が子孫也世々清水越の関守たりしとぞ長尾伊賀守の城跡あり

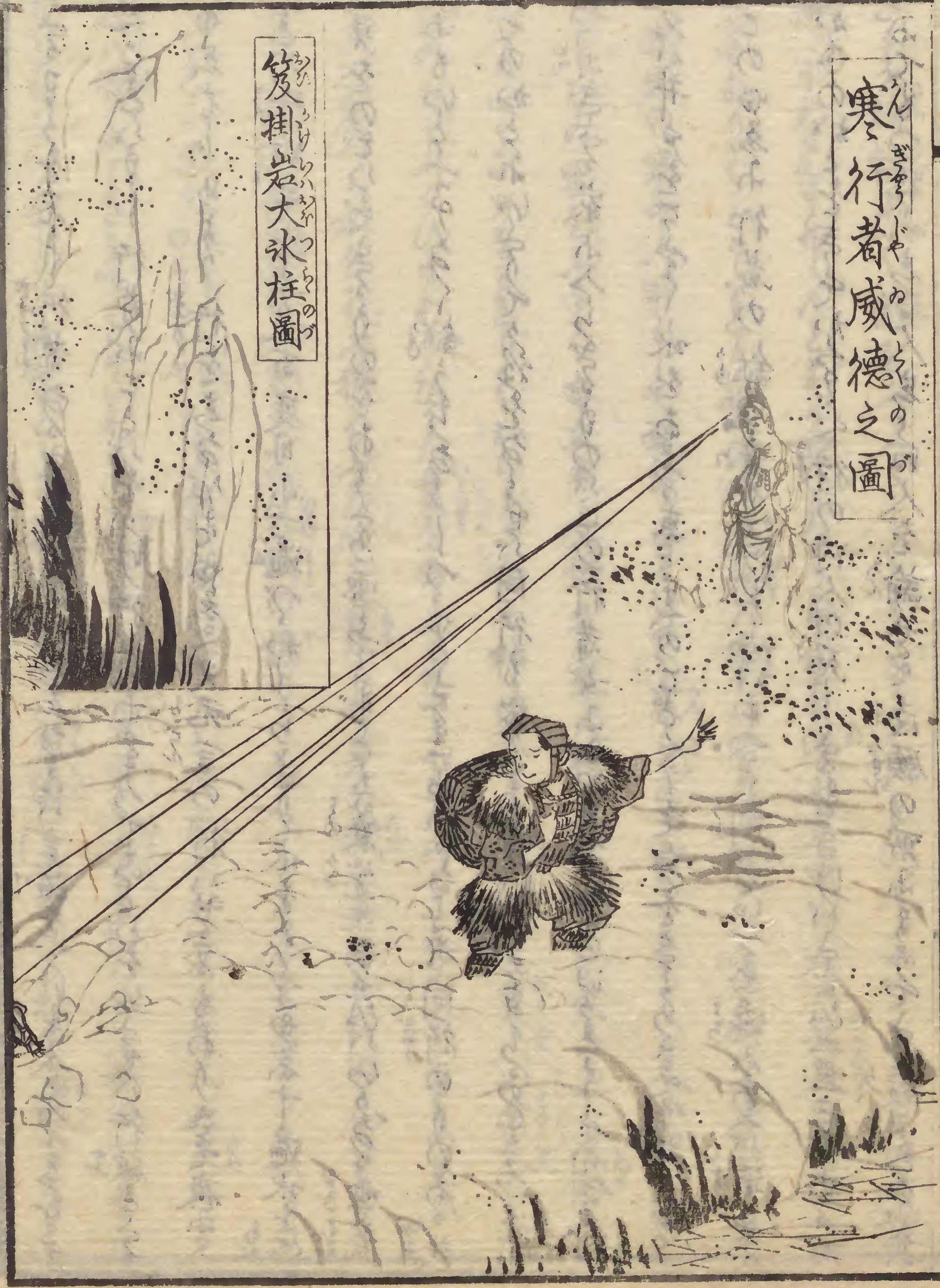
○滝の氷柱

我が上越後ハ山岳つらなりたれバ滝多し滝ある所に夏木の大樹ありて春にいたり枝につもりし雪まづとけて葉をいださぬ木の森をなしたるに滝の水烟枝に潤ひしが津となり氷柱となりて玉簾をかけ周したるやうなるハこれも又たぐふべきものなしさてまたその滝にもあたる水氷柱となり玉簾の内に滝をかくしたるありさま四辺ハ乱瑶細玉の雪中之かの玉を出といふ崑山もかくやとおもはるゝかゝる奇景も猟師樵夫のやからなる人稀にこれを見るのみ暖国の人にミせなバいかにめづらしとかおもひなん牧之拘崎より妻有の庄へ山越する時目前に見たる所也

○雪中の寒行者

我が家に江戸に二とせ居したる僕ありしがかたりしに江戸にて寒念仏とて寒行をする道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴が森千住にいたり刑死の回向をなすそのさまハ股引草鞋ゆへあたゝかに着てつとむるなり又寒中裸参りといふあり家作にかゝはるすべての職人の若人らがするなりそのさまハ常より長く作りたる挑灯に日参などの文字をふとくしるし

しるを持裸にて鐃をふりつゝとなへあるくハおもひ〳〵にこゝろざす所の神佛へまゐるとまゐらんとする時ハかならず水を浴ぶ寒中の夜ハ職人も西東へはせありくことなり我国の寒行ハ事ハ他に似てその行ハまるで異也我国の寒中ハ所として雪ふらざるハなく寒気のはげしき事ハすでにいへるがごとしその雪をふみて毎夜寒念佛又ハ寒大神まゐりとて寒中一七日或ハ三七日心々に日をかぎりておの〳〵が志を神佛へまうづるおほくハ農人の若人ら商家のめしつかひもありひるハ業をなして夜中にまうづるハ昼のいとまなきゆゑ也日に三度づゝ水をあぶ猶あぶるハ心々也禁じて身を拭ふ事をせずぬれたるまゝにて衣服を着し坐するにハ米稿の穂の方をくゝりたるを扇のやうにひらきてしきて坐し（此こゝハ七五三のちゞろとぞ）かりにも常のごとくにハ居らずこの由に此束ねたる稿ハ帯にはさみてあるなり又行の中ハ無言にて一言もいはず又母のある妻さりとも女の手より物をとらず精進潔済ハ勿論也他の人もかまどが腰にはさみてゐるをみれバ行者なる事をしりむごんなれバ言語をかけず人々つゝしむ也ことさらいはし行者にことばをかけ行者あやまりてことばをいださバ行破れたる由なれバはじめより行をなさゞるも由なし也又無言の行ハせざるもありさて夜に入れバ千垢離をとり百度目に一遍づゝかしらより水をあぶる由なり十遍水を浴身をのごはざるものをおもへ雪ふらざれども蓑笠を用ひいかなる雪荒にもいとふ事なく鉦うちならしつゝゆくてまでにハかならず同行のものある故そのかどにいたりて鉦をならせバ同行も家にありて鉦をうちあはするとぞ出きたる家に入らざるものハこの行者女にゆきあへバ身のけがれとして川に入り又ハ井戸をたゝへて水をあぶる事まへのごとくして身をきよめさてまゐるなりこの由に行者の鉦の音をきけバ女ハすべて門へハいでず道にあへバ遠くにかねのおとをきゝてかくるゝ也行の内人の死したるをきけバたとひ二里三里ある所にても其家にしる人しらぬ人を論せず志願の所にまうでゝ飯をくふなど其



寒行者威徳之圖

笈掛岩大氷柱圖

家にいたりねんごろに回向せしめとても行の一ツとせざるゆゑに不幸ありて
日のたゝぬいへにハ行者のきたるをまちうくるものハなけれバいかにも清くして
待こ寒念佛寒大神まゐりの苦行なりまし件のごとくなれバ他国にある
ぞ江戸の寒念佛裸まゐりに比ぶれバそのさまこそ異なれかゝる苦行をなすものに
やその利益の灼然事を次にしるしつ苦行して祈れバいづれの神佛も感
應ある事を童蒙に示す

○寒行の威徳

近來の事なりき我が住塩澤より十町あまり西南にあたりて田中村といふ
あり此村に右の寒行をする者ありけりある日米俵を脊負ひて五六町へだ
てたる中村といふへゆくその道ハ三国海道なれバ人あしも繁しされバ雪道ハ
人の踏かためたる跡のミをあるきてもすゆゑいかなる廣き所も道ハ一條にて其外
をふめバ腰をこえて雪にふミ入るゆゑそれゆゑに重荷など持たるハことに武

家といへども一足踏退てふミのくべき道を譲るが雪国の習ひなりかの田中の者一人
の武士にゆきあひ重荷なれバこなたより一足ふミのきたるに武士ハ声を
あらゝげ脇よれといふ今ひと足ふミのくべ重荷ゆゑことさら雪におちいらんと
おもふゆゑいかにせんとためらひしを無礼ものめと肩をつきたるゆゑ俵を脊負て
いかでたまるべき雪の中へよこさまに轉び倒れしに武士も又人に投られし如く
倒れけれバ田中の者ハ早く起て后もミずしていそぎゆきけりかゝるわざハおなじ
田中の者ちかくに来り武士の雪中に倒れて起もあがらざるを不審立よりてみるに
ぞ病平なりといへバ武士ちからなきこゑしてかうしたまへよといふその面色ハつねならず
ほど病人ともみえざりしいざとて手を採て引起さんとするに手をのべざれバ抱えお
こさんとすれどもおきえず揃力のかぎりおこさんとすれども重き事大石の如く
ゆゑ身を動さずこハ不思議と驚怖るをみて武士しかじかの事ありしが五体
すくみて動く事ならずといふ田中のものこの武士が米俵を脊負ひしものと

いひしをきゝて心におぼえあれバさてハと心づきてまゐりぞ行者の罰なるらんと
行者なるをかゝりきらせよとまでもかたづけきてある中村へ中くものとかの行
者をたくつれきてさんことび玉へといよりハ程ちかしまち玉へとてまたせおきすぐに行者
をつれきてけれバ武士ハ手をとりてゆるしたまへといふ行者ハいかりたる色
もなくなにともいはず衣服を脱てかの水揚にありけ赤裸になりて水を浴て寒
さをしのぎまゐりたる方をふしをがみて武士の手をとりて引起しけれバなにのくもなくお
きあがりいかにも恥かしき也そ礼をのべて立さりけるとぞ常に我が家に来る
田中のものがかたりき

○雪中の幽霊

我が隣驛関といふ宿につゞきて関山といふ村あり此村より魚野川を渡る舊
き橋あり流れ急なれバ僅の出水にも橋をながすゆゑ假に造りたる橋なれ
ど川廣けれバさしもながらぞ雪の頃ハ所のものゝ橋の雪を掘て途を作れ
ども一夜の内に三尺も五尺もつもる事もあるゆゑに日毎にもわくざれバ橋幅の
狭きに雪のつもりたる上をこゆるなれバ渡り慣たるものもあやまちて川におち入り
溺死するものも間あり○さて此関山村のかたはらに独り草庵を結びて
住む源教といふ念佛の道心坊ありけり年ハ六十あまりにて念佛三昧の
法師なれど无学なれどもその行ハ碩僧にもをさく劣らざる僧なれバ年
毎に寒念佛の行をつとめ无言ハせざれども夜毎に念佛して鉦打ならし
ものにまゐりしがつゞき二夜に一度ハかの橋に立て年頃おぼれ死たる者の回
向をなしけるに今夜ハ満願とてかの橋にもいでゝ殊更につとめて回向をなし
鉦うちならして念佛しけるに皎々たる月遽然に曇りて朦朧となりてハいかが
しと思ひし時に水中より青き火閃々ともえあがりけれバさてハ亡者の陰火な
らんと目を閉てかねうちならし声高く念佛して目をひらきて橋の上二間を
隔て年齢三十あまりとみゆる女白き青ざめたる顔に黒髪をさばらしかけ

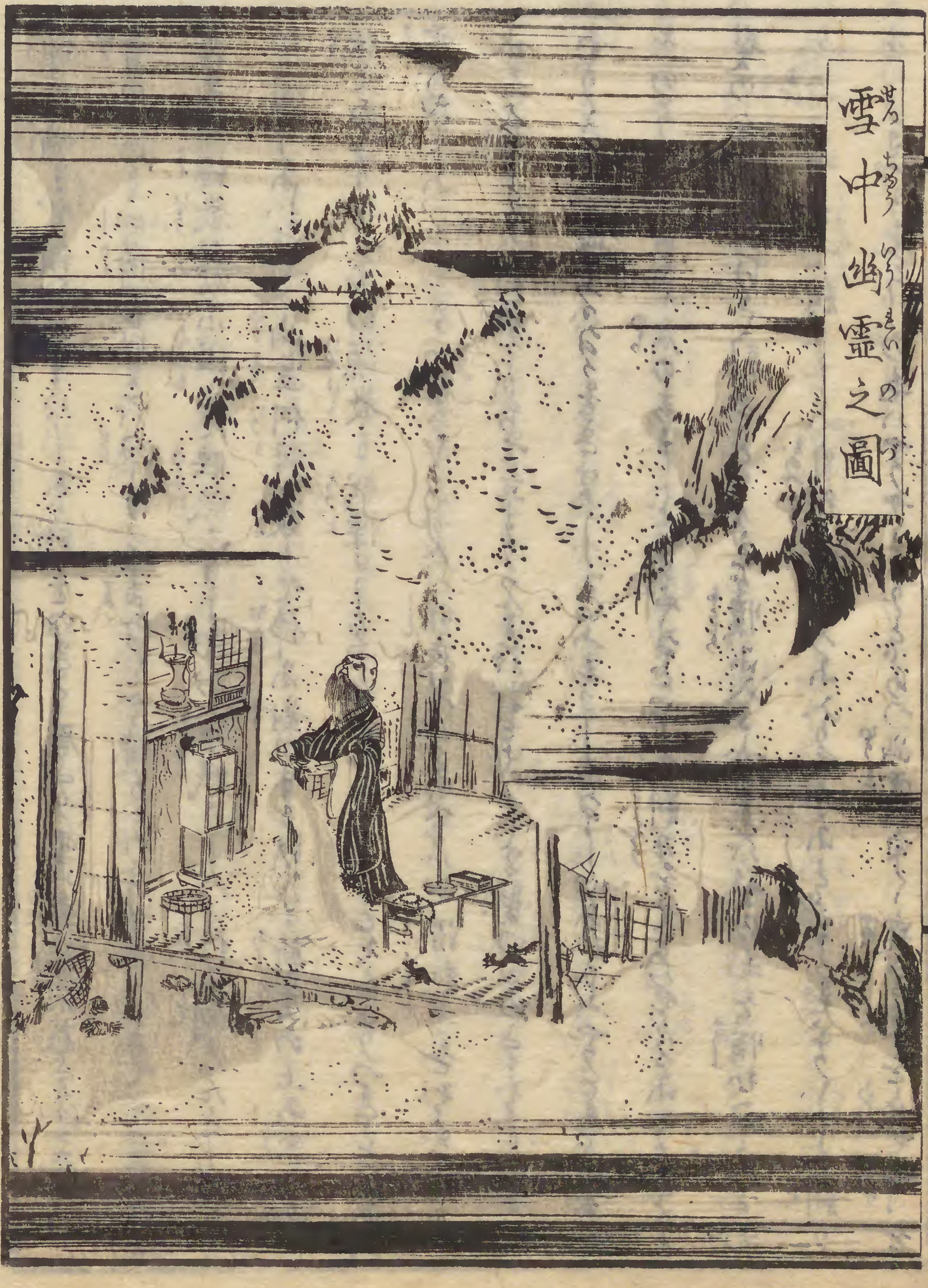
今水よりいでたりとおもふばかり濡たる袖をかきあはせて立り常人ならバ呼といひて逃べきにさハなくてその方に身を對てつく〴〵見るに斯闇くありしにかゝるものゝありありと見ゆるもたゞ人ならじと猶よく見れバ体ハ透徹やうにてうしろにある物も幽に見ゆ腰より下ハありともなしともおぼろげなりこれこそ幽霊なるべしとしきりに念佛しけれバ移歩もなくまへにすゝみきたり細微なる声していふやうわらハハ古志郡何村（村名ハゆるす）の菊といふものゝ夫も子も冥途にさきだちて獨り跡にのこりかなしき烟りさへ立かね侍れバこれよりちかき五十嵐村に由縁の者あるゆゑ助けをもとめんとてこの橋をわたりかゝりしにあやまちて水に入り溺死たるものゝ今夜ハ四十九日の待夜なれど世にしれざりしゆゑ誰ありて一掬の水だに手向る人なしきるをおん僧しばしこゝにきたりて回向ありつる功徳によりてありがたく佛果をうべけれども頭の黒髪が障りとなりて闇浮に迷ふあさましさよ此上の願ひハ此かみを剃こぼして玉はりしあらバ悲哉とて白き袖をあてゝなく〳〵と

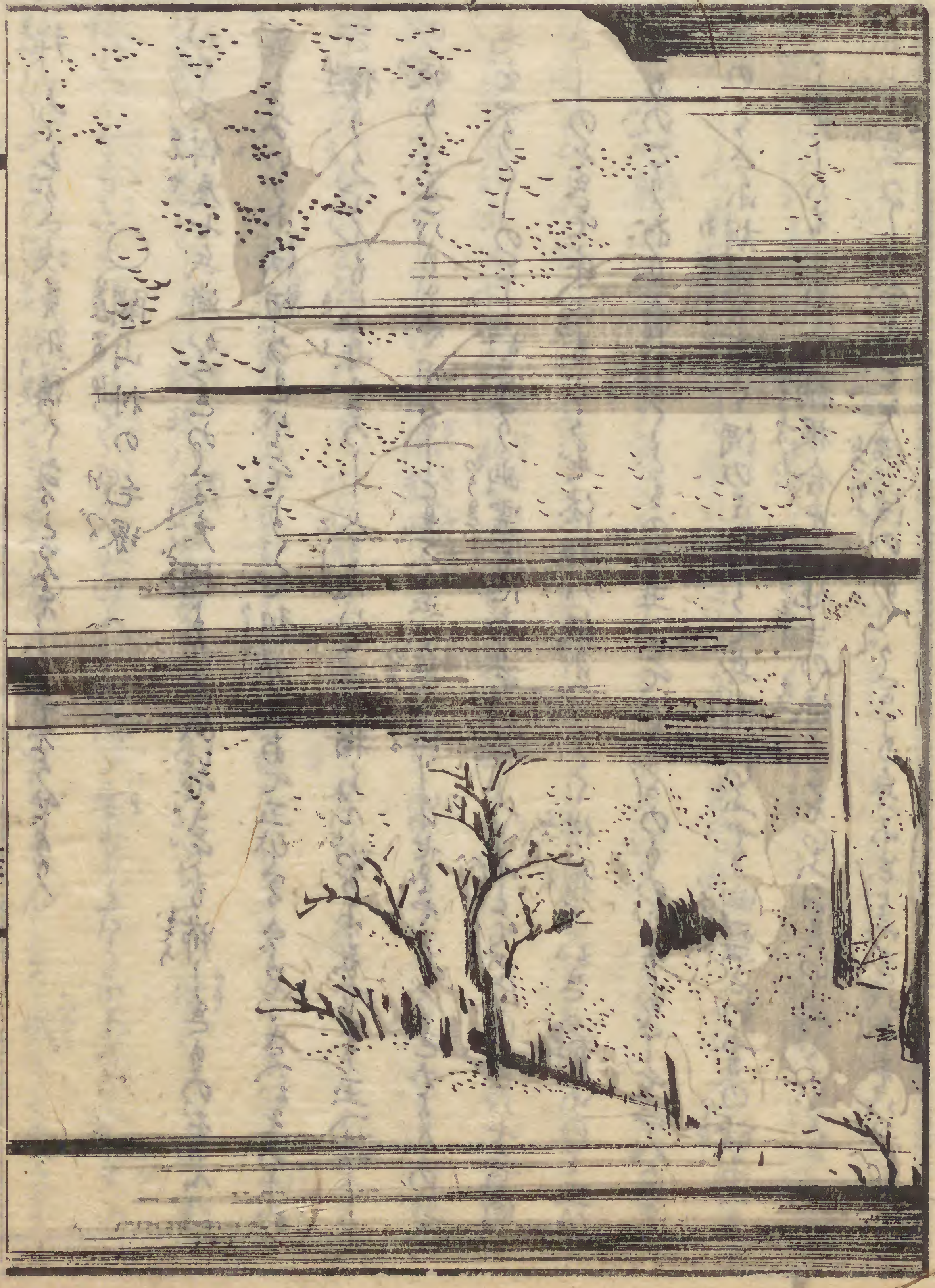
泣けり源教いふやうそハいとやすきことなれどもこよひハ剃べき物もなければあすの夜ふけて関山の庵へきたりたまへ望をたつし申さんといひけれバさもうれしげにうなづくと見えしが烟りのごとく消うせ月ハ皎々として雪を照り

○さるほどに源教ハかへりて朝日人をもて親しき同じ村の紺屋七兵衛をまねき昨夜かう〳〵の事ありしとお菊が幽霊の吏をこまかに語りいお菊が亡魂今夜かならずきたるべしかゝる事ハ佛に疎き人らにもしらせまく教化の便ともなるべくかの人ゝどもへもしらせおけどもふ證人なけれバ人ゝ空言とおもふらん和殿ハ正直の聞えある人なれバ幽霊の証人にたのまんとこゝも人の為とおもふて七兵衛も此法師とかねてねんごろにて志かも念佛の信着なれバ打うなづき御坊のことゝあれバいかで固辞申さん夜とおもふころに來べし何方にもあれ隠れゐてみとゞけ申さんされバよ佛檀の下こそよきかくれ所なれどかまへて人にかたり玉ふなかれされバ幽霊をみんとて村の若人らが來べ

きぞ心えたりとて立皈りぬ
○斯てその黄昏にいたり源教ハ常より心して佛に供養しそこら清らか
なし経を誦し居たり七兵衛もやがてきたりぬ誦しをはりて七兵衛に物などくはせ
さて日もくれければ佛壇の下の戸棚にかくれをらせ覗くべき節孔もありさて
佛のともし火も家のともしびも幽にかし佛のまへに新薦をしきて幽霊を居
らする所とし入り口の戸をもさしもせでしあけかき研たる剃刀二てうを用意
し今や〱と幽霊を待居たり此夜ハあやも雪ふりてさしもせでしあけかきたる
戸口よりもふりこむ風にありしもきこえんともせず申まで戸をさし炉のそばにあり
て戸棚の七兵衛にいふやう蒲團ハあまたありそこにありて眠り玉ふないか
できることせん幽霊をみんとかりなバ心に念佛申すのミ御坊こそくせをいでてふ袮
こぎ玉ふなめ吁な音たてしあづかにいく幽霊をみるともかまへて音をたて玉ふな
とのひつ手作とて人にもらひたる烟草のあらく刻るも吸あきて呻に会

佛を嚙まぜ領ひ抚まはしながら髭をぬきて居たり雪ハ雪簾にあたりてさら〱と
音のふのミ四隣なければ寂として声なく時もうつりけり○さて幽霊ハ影も
みえざれど源教ハ炉に温りて睡眠をもよほし居眠りつゝ終に倒れんとして目を
ひらきしに菊が幽霊何時か來りて佛に對ひまゐらせたる新薦の上に坐り頭を
低てありけるが源教も戦慄せしが心をしづめてよくこそきたりつれとの幽
霊ハさらにこたへをいださず源教ハ昨夜みたるにかハらず源教手をそゝぎ盥の
水をくみより剃刀をとりもちて立よりつればうちさしたる髪つかのまあたりぬれて
ありきまで雪ふるうつをきたりしとのふあやしとも身に心にかゝりしとまが髪の毛
をのこしたがふ后のあとしとせずやなど心して剃刀をあてがひそれにいたるかれども
髪の毛糸をつけて引ごとくかきで懐に入る女なれバ髪の毛を惜むならんと毛
を指にかゝきて剃りしに自然とところに入りて手にとゞまらざるにとくして剃り
をはりたりしをとりしの毛ハやうやうとりとげつ幽霊ハ白く瘦る掌を合せ佛を


雪中幽霊之圖



拜まつりし次第に薄くなりてつひに消えうせけり

○関山村の毛塚

かくて餅屋七兵衛が住居なる戸棚より出しはさても怖しきものを見たる事なれバいかに法師なればとてよくぞ剃刀をあて玉ひけるぞ我等ハおそろしかりき独りかへらんも気味わろし今夜ハこゝに宿らんいかにもやどり玉へ待し人の皈りしなれバいざや用なしとて玉へ后の証しにせんやとてこれなりの髪の毛をきりしのこしハあまたり幽霊も心ありてのこしつらんとて見せけれバ七兵衛もさしのぞきて手にもとらぬ法師ハ紙につゝみて佛壇におき夕間にのこし玉ひし酒ものこりあり肴ハなくともの玉へとていさゝかのものをとり出して二人ながら炉のもとに胡坐しまゝ酒のみながら七兵衛がいふやう幽霊といふものの話にハきゝつるが見しハはじめてぞ袖振合も他生の縁とこそいふなれいかなる故にみえしぞも本意なし今夜こそ佛法のありがたさをも身に志るしつまれバ此世いかなり

ゆへて百万遍をなしてお菊が佛果のいとなみにせん源教そのほか功徳なさん古志郡のお菊がいうれいをみとゞけたりと人々にかたり玉へ愚僧もまたこの事を証人として幽霊をさとりて教化のたよりにせんまでにむかしもかゝる事ありしと砂石集にみえしなど人にきかするをおそろしげにおぼえて一ツ二ツかたりきかせなどして夜もふけゝれバ一ツの夜具をかりしてうづくまりふしけり

○さてあけの日七兵衛源教を伴ひて家に皈り四隣の人をあつめてお菊が幽霊のことをかたりけれバ源教懐よりかの髪の毛をとり出して見せけれバ人々奇異のおもひをなしぬさて七兵衛百万遍のことをいひしにあつまりし者どもそれこそよき善行なれとおもひおもひに帰りし玉へ茶の子ハこなたよりもちゆかん御坊ハ茶の用意をなし玉へ数珠ハ庵にハなりきとてもおてらのを借てもちゆかん猶人々をもさそひあはせてゆかんといふ七兵衛が妻もかたへにありしが夫にむかひてそのゝちに餅をつきてあたへむといふにもよからんとて俄にそのまゝ

わしをなしけり○かくてその夜源教が草庵に人〻あつまりおかしこりおひて
念佛となへけれバなか〳〵にぎハしき佛事となしけり此事こゝかしこに傳へ聞えて
話柄としけるがこゝろざしあるものらいふやう源教がもちしかの髪の毛を瘞め
石塔を建て供養せバお菊が幽魂黄泉地のかげにもよろこびなんといひ出し
にかなへし心の人あまたありてそのことのひ終に石塔を建んとする時にいさ
りて源教いふやうかゝる事の導師こそんハ我がおよぶ所にあらず是最上山関興
寺の上人を招請あるべしといふ人〻さらバとてかしこにいたり事のよしをつげ
てお菊が戒名をもらひお菊が溺死る橋の傍に髪の毛を埋め石塔を建る事
ものべく人を葬るが如くしてみなあつまりてねんごろに佛事を營しにかの緋
屋七兵衛ハ此事より發心して后に出家しけるとぞこハひとむかしまへの事なりける
関山の毛塚とて今に残れり

○雪中鹿を追ふ

他国の人越後ハすべて大雪の国とおもふめれどさにあらずまへにもいへる如く海
濱に近き所ハ雪浅し雪ふかきハ奥沼頸城古志の三郡或ハ苅羽三嶋の二郡の
よりて深浅あり蒲原ハ大郡ゆゑ雪薄き所あれども東南ハ奥羽に隣りて高嶺つらな
るゆゑ地勢によりてハ雪深き所あり雪深き所ハ雪中牛馬を駆ふことなら
ざれバ人ハ雪に便利のそりといふものを用ゆれども牛馬にハことをかくこそ事あさ
ハぞかし雪中にて獣を追バ首のおそりまで雪にうづまらんさればつらき事ある
ざるべしおよそ十月より歳を越えて四月のころまで雪あれバむなしくすぐる
のみにてまた暖国にハなき難儀の一ツとさて獣ハまへにもいへるごとく初雪をみて
山つたひに雪浅き国へ去るもあれども行后れて雪にうづむもあるべしこれを狩る
事あり熊の事ハ上巻にいへり野猪ハ猛きものゆゑ雪ふかくとも得がたしさて鹿羚羊なども
弱きものゆゑ雪中ハ得やすし鹿ハこゝろ高慢なるものゆゑ雪にそしらるゝ人より
おそきに似たり鹿ハ深山をこのまずかたちハ端山に居るものゆゑすべて物に慣

見ばその妙あり山猟に慣ざる者ハ雪の足跡をみてその獣をしりまた二三
日前か今朝のあしあとか今ゆきしあとかてその時をもしる也三国嶺より北
へつゞく二居の峠あたりの鹿おほひあるをきゝしふしぎ鹿おほひにゆかんとて
かたらひあはせおのゝゝ雪を漕ぐべき（ふみ雪をゆくをいふ里ことばにこぐといふ）かどに身をかため山刀を
さし鉄炮手鎗又棒など持て山に入りかの足跡をたづね跡に随ひつゝかならず
鹿をみるかぎり人をみて逃んとすれども人のみちしるになかゝおよばず鹿ハ深田をゆくが
ごとく終には進ひつかれたるところをあるひハ剛勇の人などハ角をとりて組ふせ
山刀にて刺殺もありとぞこれらハ暖国にハなきことなるべし

○泊り山の大猫

我が隣駅関にちかき飯士山に続く東に阿弥陀峯とて樵する山あり（村々持分の）
定あり二月にいたり雪の降止たる頃農夫ら此山に樵せんとて語らひあはせ連日の
食物を用意しかの山に入り所を見立て仮に小屋を作りこれを寝所となし

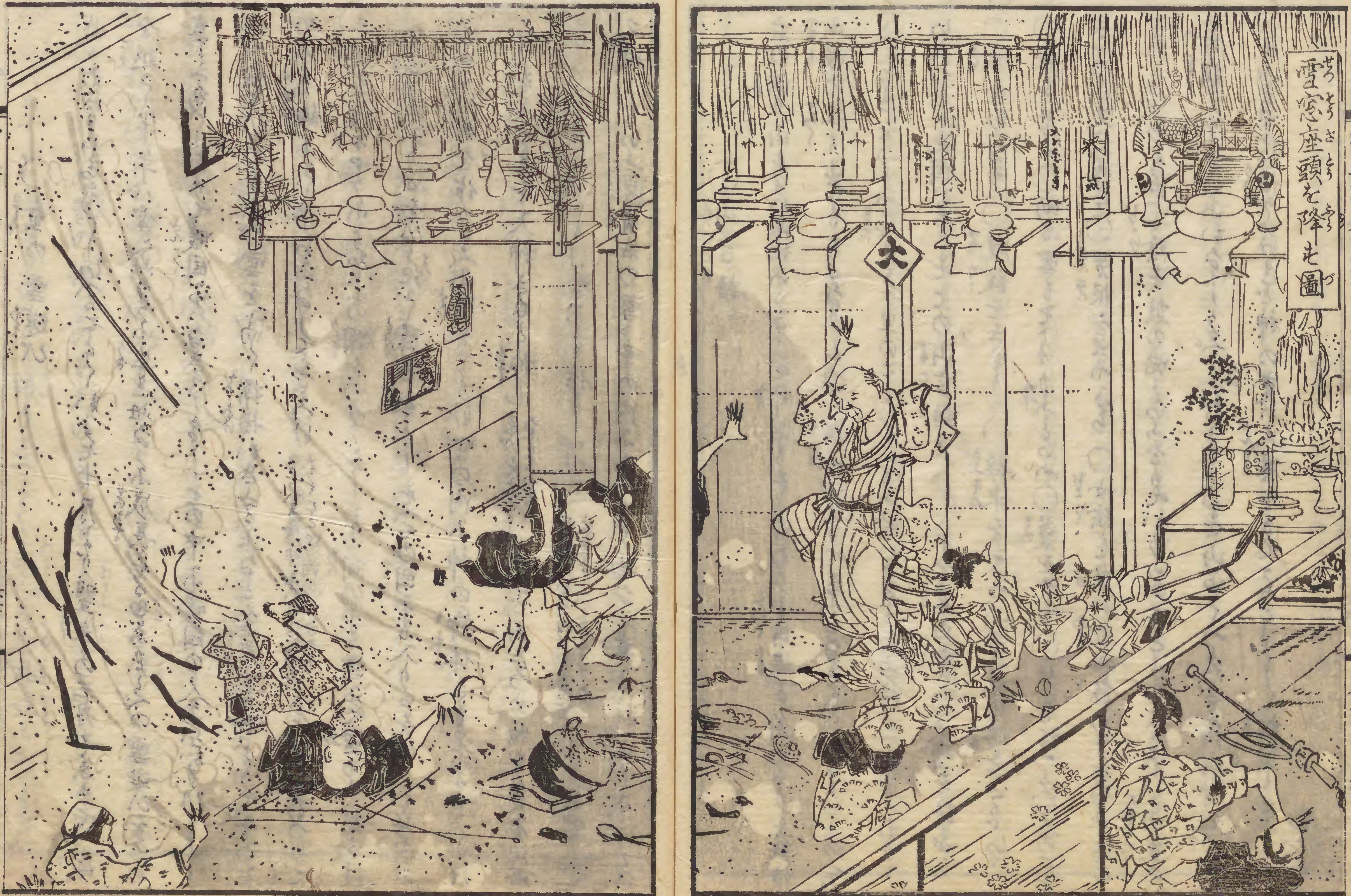
毎日ここかしこの木を心のまゝに伐とりて薪につくり小屋のほとりにあまた積
おき心に足るほどになりぬればそのまゝに積おきて家に皈ることこれを泊り山といふ
（山にとまりゐて夏をまつゆゑ也）さて夏秋にいたりぬれば積おきたる薪も乾ゆゑに牛馬を駆ひて薪を
家に運びて用にあつる也雪ふかき所ハ雪中にハ山に入りて樵する事あたはざる
ゆゑの所為なり我国雪の為に苦心する事の一ッ也右にいふあたりなる所にハ水なく谷
川あれども山よりハ数丈の下をながるれバ汲ことおほかたぞこれに年歴る
藤蔓の大木にまとひたるが谷川へ垂下りたるあり泊り山して水汲ための樽を脊
にくゝし負ひ此ふぢづるをたよりとして谷川へくだり水をくみてたるの口をつめて
脊におひふたゝびふぢづるに縋りてのぼる雲梯をのぼるさまこゝにとまり山をするものこの
ふぢづるなければ水をくむことならずよりや縄を用ふとも此藤の強にハおよばず
このゆゑに泊り山するもの此蔓を宝のごとく尊ぶとぞひとゝせ泊り山し
たるもの語りしハことし二月とまり山し時連のもの七人ありしにありて

木を伐りて居たりしに山々に響くほどの大声して猫の鳴し由人々はおそれ
かのきこりが小屋にあつまり手に〳〵斧をたづさへ耳をすましてきけバその声
ちかくにありとききけバ又遠くに鳴とおもへバちかし あまたの猫かとおも
へバ其声ハ正しく一ツの猫なれども其さまをみせず なきやみてのち七人の
ものおそる〳〵ちかくなきつる所にいたりてみれば凍たる雪に踏入たる猫の足跡
あり大さつ鉢の丸盆ほどありしとかたりき天地の造物かゝるものありしともいふ
べからず我が友信州の人のかたりしハ同じ所の人千曲川へ夏の夜釣に行し人の
三人もをるべきほどの巌ありよき岩水より半いでゝありよき釣場なりとてそこに
のぼりてつりをたれてゐたりしにしばしありて其の岩に手鞠ほどに光るもの
二ツ双びていできたりこハいかにとおもふうちに月の雲間をいでたるによく〳〵見れバ
岩にハあらで大なる蝦蟇にぞありけるひかりしものハ目なりけり此人いきたる心
地もなく何もうちすてゝ逃げさりしとかたりぬ

○山言語

右の泊り山する者ハ此地にかぎらず外にもする所あり小出嶋といふあたり上越後
山根の在々にてもする也すべて深山にありて事をなす者ハ山ことばといふ
ありて里のことばをつかふを忌て里のことばをつかふ時ハかならず山神の祟りありと
いひつたふ他国ハしらずその山言語といふハ○米を草の実○味噌を汁ぶら
○塩をかへなめ○焼飯をざわう○雑水をぞろ○天気の好をようゐ
○風をそよ○雨も雪もそよがふといふ○蓑をやち○笠をてつか○人の死を
まがつたと又ハへねたと○男根をさつたち○女陰を熊の穴此餘あまたありさの
こハとてあるがせ女陰を熊の穴といふをもておもふに里にての言ばハ商家の
符調といふものにおなじくべしかゝることばを山中にてつかはざれバ山神の祟り
ありといふハ信がたけれど神の事ハ人慮をもてはかりしりて議べからざる物をや

文溪堂蔵


雪窓座頭を降む圖
大

○童の雪遊び

我があたりハ前にもいへるごとく およそ十月より翌年の三月までハ歳を越て半年ハ雪の中に生れ雪の中に成長するゆゑわらべの雪遊ひを為事とし さまざまありて暖国ゆへハ見ざる事多し その中に暖国の人ハおもひもよらざるあそびあり まづ雪を高く掘揚おきて上るところを童ども打よりて手あそびの木鋤にて平らかにしてふみつけ 童ども雪中にハいつも木すきをもてあそぶ雪国のつねなり さて雪をあつめて土塀を作るやうにおよそどの囲をつくりたてその間ひにも雪にて壁めく所を作りたてに入り口をひらきて隣の家としまたその囲にも入り口をひらく此内に宮めく所を作り正面に階をまうけ宮の内に神の御体ともみゆるやうに雪にて作りこれを天神さまと称し あそびも大かたこどもする 莚など敷きつめ物を煮焚する所をも作るすべて雪にて作りたるに 雪をくりぬき窓をあけ火をもてふさぐ これを雪ン堂又城ともいふ児曹右の雪ン堂の内にあつまり物など煮て神にもさゝげこれ

よりてうちくるふ又間にへだてを作りこなたかなたの家に准へさまざまの事をなして遊ぶあそびハ俵ハ斯作りこれを打こかつをもあそびとし又他の童のこれにちかくハおのれおのれさまに作りこれを城をかまへなどいひてうちくるふもありそのさまにハおくもありおのれ牧之も童のころハかゝるあそびの大将をもせしがむかしく犬馬の齢を歴て今ハ夢のやうになれり

○雪に坐頭を降す

まへにもいへるごとく雪のうちに春をむかふるゆゑ歳越の日などハいづれの家にても二三日も雪を掘て窓のあかりをとりかりくる雪も年越の事なればきにまぎれて取除をもらせど掘揚の屋上よりたれし雪道歩行にさまたげあしき所もありしかば歳越の夜余が点をもらる俳諧の巻を懐にし俳友兎角子を伴ひその巻の催主のもとへいたりて巻を主に遣しけるにいとよろこびて今夜ハめでたき夜なりゆるく語り玉へとて主人の妻娘も打まじり

てなぐさみしけりさてさまぐの雑談のなかにあるじのつま牧之に歳こしの
夜ハ鬼の來るとて江戸にハ厄拂ひといふものありて鬼を追ふをおもしろく
いひなす物もひもときゝしがむかしもさることありしや鬼の來るといふ空言
も古きつたへにやと問ふ余こたへてそハあるじが持玉ふ年浪草に吾山があらま
しハ志るせりかの書を見玉へといひしに鬼角子ハ酒にも醉たまへバ戯言ていふ
やう鬼のくるといふすじみでそらごとならん女などのあつまりをる所ハ鬼の好
む所ぞ鬼のくるまバこそそこしこの豆まきを鬼やらひとハいふなれ俳諧の季よ
せにもみえたりといふ母のかたはらにゐたる十三になる娘がとふていしその鬼を
みしことありしや。みたりとも〳〵鬼にもさまぐあり青鬼赤鬼ハ常のことゝ
色の白くてやさしきを白鬼といひ黒くて肥太りたるを黒鬼といふいのまゝ江戸
に在し時厄拂が鬼をくいつかまへて西の海へさらりと投るをみたる事ありその
鬼ハ黒かりし江戸の歳越にきゝし夜ハ鬼のありくなればこゝらのとしこしにハ

鬼ハいくらもありくべしあり窓よりのぞきもやせんとさらむとおもふまゝにおどせバ
よめもむすめも空言のなきにあきれ口にハいへど母の左右によりつきておそる
さまなどしけりかゝるをりしも人々の座りゐたる后の方にちかきあかり窓ありし
がきびしき音ありてまどをやぶり掴あげの雪がらく〳〵と崩ましおちかゝる中に人
の降りくだりけれバ女ハあなやと叫といひてうつぶして愕然迷ひ男ハとりみだし立あが
りておどろきけり下部らもこのおとにかけよりて崩まじおちかゝる雪にまぎれ
たる人をみれバ此家へも常にきたる福一といふ按摩とりの小座頭なりけり幸ひに
疵もうけざりけるが撫まはし腰をさするこれ福一なりとてみなわらへバおのれも
わらふ下部らハおちたる雪をとりのけ窓をもかりにつくろひなどしあるじの妻
ねぎらひていふに福一鬼角どのゝ鬼のはなしきゝてをりましに鬼かとおもひて
皆きゝ給ひけりめでたきとしこしの夜に盲が窓よりおりてきたしハいはれしきも
ありとくしいでたりとてまたかに志かりけれバあるじさまなど志かりあひぞ福一

いふにして窓よりおちいりしぞいとめでたし此はなきことひの福一うちゑみつゝいふやう
此はいかぞ今夜(こよひ)のおめでたきを申さんとてこそかどへはいでつれまかなふ所のあるじに
や掘(ほり)あげの道をふみちがひてあしもとあしくまろびきたればおもはずおちて轉(こけ)
るが窓(まど)をおしやぶりておち入るはこゝろさせずしあけるにはいかにもあるじ玉へと
いふ姫も娘も口をそろへ鬼はやとていかにくおびえたり憎(めく)き面(めつら)と腹立(はらたち)さく
いふあるじのつまいかりをやめて是もこよしの吉方(ゑはう)にあたる窓(まど)をやぶり月
のなきものゝ入りしはくちもくしいまいましきなどとくしくえまとのなりけれバ
鬼角(とかく)よろこばしく福一まづくるりと又これそのうらにこびしておくべしといへど
福一かしらを下げものを按(あん)ぞるさまありしがやがて鬼角(とかく)にむかひ哥一首(うたいつしゆ)よみて
いふきて玉はまことにいふ此福一ハとしころけれど俳諧(はいかい)もざれ哥をもよむものなり
まへバあるじこれハおもしろしとて鬼角(とかく)がかきつるをよませてきけバそのうたに
吉方(ゑはう)から福一とのみこめくら(米倉)入りて志りもち(餅)つくハめでたし

このうたをきゝて人々めでたし〳〵とさけびどよめき手をうち拍(うち)ていさゝよろこびふたゝび
盃(さかづき)をめぐらしけりあるじもんつきの羽織(はおり)を娶(よめ)にとりいださせ哥(うた)のろく
とて福一にとらせけれバ膝(ひざ)にのせてなでさすりあゆまちの高名(かうみやう)志つとて名を
そへけるよろこびつゝめでたき歳越(としこし)にきたぞめせんとて羽(え)おりきたるあとで
きぐりくちをつくりて猶よろこびけり之(これ)が吉瑞(きちずゐ)と成(なり)にん此年此家の娶(よめ)初産(うひざん)
に男子(なんし)をまうけやまひもなくておひたち三ッのとし疱瘡(はうさう)もかろくして今年七
ツになりぬ福一ハかの伶俐(りこう)ものなりしが今江戸にありて官(くわん)にもすゝみしと聞
ぬ目でたき事どもなりけり

画者　少年　京水百鶴

北越雪譜初編巻之下終　全三巻大尾

和漢印章考　五巻　同編

本朝古印の摸本を圖し其制度の用格を弁じ其考へ漢印に渉る處以て和漢と目をすべて朱象賢が印典の作格に倣ひて記り

食物沿革考　同編

昔の食物と今の食物と變格在る事を弁じ食器の古圖をのせ考を記せり

芭蕉翁年譜　同編

一名おきな年代記　翁一代の始終を記せり

高尾考　同編

妓女高尾十一代の傳を記し遺器遺墨をうつしのせり

茶湯初心抄　同編

茶道を学ばざる人此書を見ば茶席につらなりても恥をとらざるべし

俳諧早引草　著作堂主人著

四季の詞ハさらなりすべて俳諧に用ゆべきものハもらさず註釋し見るに見やすく引に速かなるを宗とし席上の重宝まことにまなびの助し

東都著作堂主人著

玄同放言

第一集三冊 第二集三冊 出來

天地之部 植物之部 人事之部 亦人事之下より噐用之部に至るこの篇ハをさをさ珍説奇談を雑識し且縮字を多く載せたれバ閲するものにあらざるもあるを上集に比ぶれバ俗の耳ちかきも多かり

同 第三集 三冊

噐用之部より動物之部に至る古噐異獣奇鳥等の圖説多く此集中に有異聞珍説多し閲するもの漸々佳境に入らん就中佛法僧鳥の寫生ハ古人の摹本を多くあつめて異同あるを著ハし他北越の雪むし異魚海獣の画圖までくはしく寫生を旨として世に罕なる物種々載たり

近刻

同 第四集 三冊

此集全部十二巻に至りて始めて全かるべし遠からぬ全書となさんものなり

近刻

天保七丙申年九月發兌

書肆
大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛
江戸大傳馬町二丁目東側 丁子屋平兵衛壽梓

国立公文書館
National Archives of Japan